# シゲキな夏

やまき

私は、夏休みを利用して祖父の家で一週間ほど過ごすことにした。祖父の家は山奥にあり周りは田んぼと畑しかないようなところである。現代っ子の私は、都会にはない大自然を満喫することより、親から離れ好き勝手にできるこの環境で、家から持ってきた据え置き型のゲーム機で、中古で買いあさったゲームを楽しむことにした。

祖父の家三日目、一度「遊びに連れてってやるぞ！」と言い連れ出され向かったイオンに行った以外は、一日中ゲームをして過ごしていた。起きてゲームをして眠くなるまでゲームこんな幸せは、口うるさい親がいる都会では、考えられない理想の田舎ライフでると言えよう。この日、祖母がおやつにと皿いっぱいの小粒サイズの三角錐の形をしたグミを出してくれた。イオンに行った時に安売りしていたから大量に買ったみたいだが、どうも口に合わなかったらしいので食べるのを手伝ってほしいらしい。一つ手にとって食べてみた。たしかに、ご老体にはこのグミにある舌の先が痺れるほどの独特の感覚は苦手だろうなと思った。が私にはこの舌への刺激がやみつきになるものだった。次から次へその感覚を味わうため口へとグミを運びあっという間に皿の上は空になった。この日もゲームで一日を費やした。

四日目、この日もおやつにグミが出てきた。どんだけ買ったんだよ！と思いながらも皿から溢れんばかりのグミをたいらげた。次の日のおやつもグミ……その次の日もグミと、結局、持ってきたゲームをやりつくし帰ることを決心する日まで、ずっとおやつはグミだった。

帰ることを決めた次の日、祖父に車で駅まで送ってもらい口うるさい親の待つ家への帰路についた。

田舎から帰ってきて数日がたった。その頃の私は、田舎で食べたグミのことで頭がいっぱいだった。あの最初、口に入れた時の刺激、しかし、舌の上でペロペロ転がしているとグミの周りをコーティングしている刺激の原因であった粉がとれ甘く噛みごたえのあるグミの真の姿が現れる。そのあられもない無防備なグミを上の歯と下の歯でしっかりと固定し噛みちぎり喉から胃へと送り出す。が、まだ終わらない。このグミは、独特な舌への感覚、固く私を満足させる噛みごたえも兼ね備えながら噛みちぎった後、飲み込まれまいと反抗するかのように歯の裏にくっつき抵抗して楽しませてくれる。最後、悪あがきするグミを手ではがして胃の中への入り口へと放り込んでやるのだが、手を使ったことで手がベトベトになり、ゲームのコントローラーを触るのを躊躇してしまう。ここで、してやられた〜！とグミの食べられてもただでは終わらない生きざまに尊敬の意が生まれる。私は、グミのファンになっていた。都会の家でも食べたいと思い、祖母にグミの名前を電話で聞いて見た。「覚えていない」ということだったが、「袋に可愛くないキャラクターの絵がかいてあったよ」と教えてくれた。その情報を頼りに最高のグミを求める私の旅が始まった。

自転車に乗り駄菓子屋へと行ったが少子化の波に負け、客が減ったことにより経営が難しくなったのか駄菓子屋はなくなっていた。次にコンビニ、スーパーへと向かったが、キャラクターがパッケージにかかれたグミはあったものの、買って食べてみると、おいしいのはおいしいのだが、刺激はなくあのグミと違い抵抗もせず噛みごたえすらなく、どちらかといえばやわらかい貧弱なグミばかりであった。数十軒もの店を回ってみたが見つからなかった。今は、夏ということもあり大自然な田舎に行っても家にこもってゲームをしている様なインドア派な私には、耐えがたい気温と日差しであった。大量の汗を流しながらもまた何店舗か回った。結局、見つかることはなかった。体力にも限界を感じ家に退きかえすことにした。帰りの道中、一軒の百円均一の店を見つけた。今までコンビニ、スーパーに絞って探していたが百均にもおかしは売っていることに気づき、立ち寄ってみた。店内を歩き、おかしのコーナーを見つけた。その時……ひときわ私を惹きつける名前のおかしが視界に飛び込んできた。その名も『シゲキックス』

これだ！とすぐ買って店先で食べた。よみがえるあの田舎で私を虜にしたグミの独特な感覚、舌への刺激、噛みごたえ、歯の裏についたグミをとったことによって後に自転車のハンドルを握ることを、ためらうことになるであろう手のベトベト感、何軒も回り、つかれていた体も元気になるほどの喜びがそこにはあった。店の中に戻り棚にあった『シゲキックス』を買い占めた。この最高のグミが二袋で百円という価格破壊に驚いた。

残りの夏休みはまさに『シゲキックス』なしでは語れないだろう。祖母が言うように袋にかかれたキャラクターは可愛くはないものであったが、シゲキ的なデザインであると私は思う。田舎で出会ったグミとのこの夏は、『シゲキックスな夏』であったと言えよう。追記、キャラクターの名前は『シゲモン』というらしい。